

| | |
|-----|------|
| 二 | 民十〇二 |
| 三 | 民九〇四 |
| 四 | 民九〇五 |
| 五 | 民九〇六 |
| 六 | 民九〇七 |
| 七 | 民九〇八 |
| 八 | 民九〇九 |
| 九 | 民九一〇 |
| 十 | 民九一一 |
| 十一 | 民九一二 |
| 十二 | 民九一三 |
| 十三 | 民九一四 |
| 十四 | 民九一五 |
| 十五 | 民九一六 |
| 十六 | 民九一七 |
| 十七 | 民九一八 |
| 十八 | 民九一九 |
| 十九 | 民九二〇 |
| 二十 | 民九二一 |
| 二十一 | 民九二二 |
| 二十二 | 民九二三 |
| 二十三 | 民九二四 |
| 二十四 | 民九二五 |
| 二十五 | 民九二六 |
| 二十六 | 民九二七 |
| 二十七 | 民九二八 |
| 二十八 | 民九二九 |
| 二十九 | 民九三〇 |
| 三十 | 民九三一 |
| 三十一 | 民九三二 |
| 三十二 | 民九三三 |
| 三十三 | 民九三四 |
| 三十四 | 民九三五 |
| 三十五 | 民九三六 |
| 三十六 | 民九三七 |
| 三十七 | 民九三八 |
| 三十八 | 民九三九 |
| 三十九 | 民九四〇 |
| 四十 | 民九四一 |
| 四十一 | 民九四二 |
| 四十二 | 民九四三 |
| 四十三 | 民九四四 |
| 四十四 | 民九四五 |
| 四十五 | 民九四六 |
| 四十六 | 民九四七 |
| 四十七 | 民九四八 |
| 四十八 | 民九四九 |
| 四十九 | 民九五〇 |
| 五十 | 民九五〇 |

是故に神に屬する事について、**矜愍**と**忠義**なる祭司の長となりて、民の罪を贖はん爲に、諸事に於て兄弟の如なるの宣なり。蓋かれば自ら誘はれて、艱難を受たれば、誘ひるる者を助得るなり。

爾曹は故に同く天の召を蒙りし、**モーセ**が神の全家に忠義をせし如く己を立し者に、**忠義**なる我儕が信する所の使徒たる祭司の長たる人、**エヌ**を深く思へし、その家を建りし者の家より過て樂あるが如く、彼も**モーセ**より過て樂を受べき者とせられたり。凡そ家の之を建れる者あり、萬物を造れる者の神なり。夫**モーセ**は將來に言傳へられんとする事の證をせんが爲に、僕人の如く神の全家に於て**忠義**をなし、**キリスト**の子たる者の如く、神の家を幸れり。我儕もし信仰と望の喜ぶを終まで堅く保つ我儕の其家なり。是故に聖靈の云る如く、**モーセ**も今日其聲を聽かば、野に在て主を試みたる日、その怒を惹し時の如く、**爾曹**の心を剛愾にする勿れ。其處に於て、**爾曹**の列祖吾を試み我をためし、又四十年の間、わが作爲を視

| | |
|-----|------|
| 一 | 民九二七 |
| 二 | 民九二八 |
| 三 | 民九二九 |
| 四 | 民九三〇 |
| 五 | 民九三一 |
| 六 | 民九三二 |
| 七 | 民九三三 |
| 八 | 民九三四 |
| 九 | 民九三五 |
| 十 | 民九三六 |
| 十一 | 民九三七 |
| 十二 | 民九三八 |
| 十三 | 民九三九 |
| 十四 | 民九四〇 |
| 十五 | 民九四一 |
| 十六 | 民九四二 |
| 十七 | 民九四三 |
| 十八 | 民九四四 |
| 十九 | 民九四五 |
| 二十 | 民九四六 |
| 二十一 | 民九四七 |
| 二十二 | 民九四八 |
| 二十三 | 民九四九 |
| 二十四 | 民九五〇 |
| 二十五 | 民九五〇 |
| 二十六 | 民九五〇 |
| 二十七 | 民九五〇 |
| 二十八 | 民九五〇 |
| 二十九 | 民九五〇 |
| 三十 | 民九五〇 |
| 三十一 | 民九五〇 |
| 三十二 | 民九五〇 |
| 三十三 | 民九五〇 |
| 三十四 | 民九五〇 |
| 三十五 | 民九五〇 |
| 三十六 | 民九五〇 |
| 三十七 | 民九五〇 |
| 三十八 | 民九五〇 |
| 三十九 | 民九五〇 |
| 四十 | 民九五〇 |
| 四十一 | 民九五〇 |
| 四十二 | 民九五〇 |
| 四十三 | 民九五〇 |
| 四十四 | 民九五〇 |
| 四十五 | 民九五〇 |
| 四十六 | 民九五〇 |
| 四十七 | 民九五〇 |
| 四十八 | 民九五〇 |
| 四十九 | 民九五〇 |
| 五十 | 民九五〇 |

たり。是故に我々の代の人を怒りて、彼等の常お心感りと曰ふ。然るに我道を知らざりし故に、我儕より彼等へ我が安息に入べからずと誓たり。兄弟よ、**爾曹**が中に**不信**仰なる悪き心を懷て、**活神**の前より離れ、墮ること莫らんや。う慎むべし。**爾曹**のうち誰一人罪の誘惑に由て、剛愾にならざるや。今日と稱するうちに、日々互に相勸めよ。その我儕もし、婚の信仰を終まで堅く持たば、**キリスト**に與る者となり。夫いへること、あむ若し今日その聲を聽かば、怒を惹し時のごとく、**爾曹**の心を剛愾にする勿れ。爾等も今日其怒を惹し者、誰に不や、**モーセ**に從ひて、**エジプト**より出たる衆の者に非ずや。神は四十年のわひだ誰に向て怒りしや、罪を犯して其屍を野に作し、者悉もに怒れるならざるや。又その安息に入べからずと誰に向て誓し、**信仰**せざるし者等に誓するならざるや。是に由て、**爾曹**が我儕が入てを、得ざるし、**不信**に由てなり。

爾曹のうち之に及ぶるもの、わらん。蓋われらも、彼等が如く、福音を宣傳

リ 民三〇九
カ 西一五七
四 民五〇二至五
女 利六十五
レ 詩四〇三
ク 利十四〇八至十
ク 民一〇一五至六六
ク 民一〇一五至六六
子 民十四〇七
子 民八〇三至六

六
六
六
六
五
四
三
二
一

このを盡業さんとして約束の上にまた誓を立給へり、神の許ることで能く
 る此二件の易きことより前に立よとの望を執んとて、怒を避たる我儕を
 慰めんが爲なり、我儕が此望の如く堅固して動かす懼の内に
 入す我儕の爲にイエス前驅して其處に入マルキセデクの班の如く窮なく
 祭司の長とあれり

此マルキセデクの王に、至高き神の祭司ありしが、アラ
 ハム王等を殺して旋して彼アラハムを迎て祀せりニ、アラハム之に
 凡て所獲の十分の一を分たり先づの名を譯バ義の王次にサレムの王と云
 これ即ち平康の王なり、三彼の父なく母なく族譜なく生の始なく亦終もか
 し神の子に象られて恒に祭司たりき、四先祖アラハム所獲の最も善物の
 十分の一を以て彼に予れば、其人の如何に尊かを思ふべし、五レビの子孫の
 うち祭司の職を受る者ハ律法に循て民即ち其兄弟より十分の一を取とを
 命せらる彼等アラハムの腰より出たる者、と雖もかは然あせり、六され

ク 利三十四至七
ク 三三〇三六
ク 利十〇九
ク 四〇六

非 六〇七節二

ク 民十六〇四
ク 利十〇九
ク 三三〇三六
ク 三三〇三六
ク 三三〇三六

六
六
六
六
五
四
三
二
一

此血脈に非ずして彼アラハムより十分の一を取て其約束を有てる
 者を祀せり、七劣れる者の優れる者に祀さるゝハ論なきこと也、八此なる十
 分の一を受る者ハ死べき者彼なるハ活る者なりと證せられたり、九また十
 分の一を受る所のレビもアラハムによりて十分の一を輸たりと言べし
 十蓋マルキセデクが彼に遇るときレビも其父の腰に在りたり、民ハレビ
 の裔なる祭司の職に本きて律法を受たり、若この職に頼て完全ことあらバ
 何ぞ別にアロンの班と稱ざるマルキセデクの班の如き祭司の起ること
 求めん乎、十二既に祭司の統かハる時ハ律法も亦必ず易るべし、十三此等の事ハ
 祭壇に役たる者なき支派に屬る者を指て言ひ、十四我儕が主のユダより出し
 事ハ明かなり、モ一、この支派に就て祭司の職のことハ何を言ざりき、十五
 既にマルキセデクの如き他の祭司起たれば、律法の易るとも愈明らけし
 十六彼ハ肉體に係る律法の例に循ひて立す朽ざる生命の能に循ひて立り、十七
 蓋スルキセデクの班の如く爾ハ窮なく祭司たりと證せられたれば也、十八

七 創世記一〇二章二節
 八 創世記一〇二章二節
 九 創世記一〇二章二節
 十 創世記一〇二章二節
 十一 創世記一〇二章二節
 十二 創世記一〇二章二節
 十三 創世記一〇二章二節
 十四 創世記一〇二章二節
 十五 創世記一〇二章二節
 十六 創世記一〇二章二節
 十七 創世記一〇二章二節
 十八 創世記一〇二章二節
 十九 創世記一〇二章二節
 二十 創世記一〇二章二節
 二十一 創世記一〇二章二節
 二十二 創世記一〇二章二節
 二十三 創世記一〇二章二節
 二十四 創世記一〇二章二節
 二十五 創世記一〇二章二節
 二十六 創世記一〇二章二節
 二十七 創世記一〇二章二節
 二十八 創世記一〇二章二節
 二十九 創世記一〇二章二節
 三十 創世記一〇二章二節
 三十一 創世記一〇二章二節
 三十二 創世記一〇二章二節
 三十三 創世記一〇二章二節
 三十四 創世記一〇二章二節
 三十五 創世記一〇二章二節
 三十六 創世記一〇二章二節
 三十七 創世記一〇二章二節

三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七

神と稱ることを恥とせざりき蓋かれらの爲に京城を備へ給ふれば也十七信
 仰に由てアラハムは試られし時イサクを獻たり其獨子を獻たり此子に就てハ爾の子孫イサクに由て稱らるべしと云
 れたりき十九彼おもへらく神ハ死より之を復活し得ると即ち死より彼を受
 しが如なりき三十信仰に由てイサクハ來らんとする事に就てヤコブとエサ
 ヲを視せり三信仰に由てヤコブハ死んとする時にヨセフの二人の子を祝
 し又その杖の頭に扶て崇拜をなせり三信仰に由てヨセフハ死んとする時
 にイスラエルの子孫のエジプトより出る事について語り又おのが骸骨の
 事に就て命じたり三信仰に由て父母ハモイセの生れたる時々の美都き子
 なるを見て三月の間これを匿し又王の命をも畏ざりき三信仰に由てモイ
 セハ成長し時バロアの女の子と稱るくを解たり三誓く罪の樂を享んよりハ
 寧ろ神の民と共に苦難を受んことを善とし三キリストの爲に受る詭謀ハ
 エジプトの貨財よりも寶貴と意へり蓋報賞を認て望バなり三信仰に由て

一 本紀の世三〇二節
 二 創世記一〇二章二節
 三 創世記一〇二章二節
 四 創世記一〇二章二節
 五 創世記一〇二章二節
 六 創世記一〇二章二節
 七 創世記一〇二章二節
 八 創世記一〇二章二節
 九 創世記一〇二章二節
 十 創世記一〇二章二節
 十一 創世記一〇二章二節
 十二 創世記一〇二章二節
 十三 創世記一〇二章二節
 十四 創世記一〇二章二節
 十五 創世記一〇二章二節
 十六 創世記一〇二章二節
 十七 創世記一〇二章二節
 十八 創世記一〇二章二節
 十九 創世記一〇二章二節
 二十 創世記一〇二章二節
 二十一 創世記一〇二章二節
 二十二 創世記一〇二章二節
 二十三 創世記一〇二章二節
 二十四 創世記一〇二章二節
 二十五 創世記一〇二章二節
 二十六 創世記一〇二章二節
 二十七 創世記一〇二章二節
 二十八 創世記一〇二章二節
 二十九 創世記一〇二章二節
 三十 創世記一〇二章二節
 三十一 創世記一〇二章二節
 三十二 創世記一〇二章二節
 三十三 創世記一〇二章二節
 三十四 創世記一〇二章二節
 三十五 創世記一〇二章二節
 三十六 創世記一〇二章二節
 三十七 創世記一〇二章二節

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七

彼ハエジプトを離れ玉の怒を畏れざりき是見ざる者を見が如く耐忍バ
 也三信仰に由て彼ハ逾越節と血を濺ぐ禮を守れり蓋長子を滅す者の彼等
 に抵ざらんが爲あり三信仰に由て彼等ハ紅海を陸の如く涉しがエジプト
 の人々を渉らんとして溺れ死たり三信仰に由て七日の間エリコの城を
 環巡たるに遂にその石垣くづれたり三信仰に由て妓婦のラバハ信せざ
 る者と共に亡びざりき蓋偵者を擧て之を平安ならしめられたれば也三われ更に
 何を言んや若しギゾオン・バラク並サムソン・イビタダ・ダビデ並サムエル及び
 預言者等の事を言んにハ時足ざる也三かれら信仰に由て諸國を服し義を
 行ひ約束の者を之の御の口を箝み三火勢を滅し劍の刃を隠れ在弱よりして
 剛強せられ戰争に於て勇しく異邦人の陣を退かせたり三婦人も亦死たる者
 の復活を受しとあり亦ある人の最も愈むる復生を得べき爲に酷刑らきて
 死るゝことを欲せざりき或人の嬉笑をうけ鞭扑れ縲縄と圍圍の苦
 を受言石にて擧れ鏢にてひかれ火にて焚かれ刃にて殺され綿羊と山羊の皮

